

「あれは子供より流しやわやくムサの母はさあんな女つイソクが  
おんなのうらみ。」

「……イソクは下帯の中に手をやった。水  
さかけられたように、ちぢみあがっているも  
のがある。ムサの手をとり、イソクは下帯の  
中に導いた。下帯の申で、ムサの手は動か  
ない。」

にぎって、とイソクはねだった。鼻声はマ  
キシキを思わせ、ムサの掌は輪を作っていた。  
輪の中のイソクの肉はかわいかった。

18

動かして、とイソクはまたねだった。ムサ  
の手の輪がやさしく上下する。はじくように、

イソクの男はみなぎった。

もっと、もっと。馬より豪華なモノにして  
くれよ、とイソク of 言葉は熱かった。

馬、マキシキ、とムサの心で言葉がぶつか  
り、彼女の手は動きをせられた。

次の動きをするために、イソクはもう十分  
だった。ムサの下着の胸のひしきを引きちぎる

ようにほぐくと、イソクは右手をすべらせた。  
やわらかな乳房は、イソクの手をやさしくあ

やす。



乳房を一つ、彼はゆっくりともんだ。はじけるような乳首の感触がイソクの唇を呼ぶ。二つの手をムサの下着の肩にかけ、イソクは引いた。肩が現われ、腕が現われ、その横には乳房が二つ現われる。

萱の屋根からこぼれてくる遠い光を受け、裸の上半身はうっすらと浮きあがっていた。イソクの唇は乳房を這い、二つの乳首をかわるがわる吸った。

ムサのかたい唇がほころび、息が洩れた。

息は荒く、丘を上る馬のようだった。

乳首を吸うイソクの唇に、ムサはマキシキの唇をよみがえらせていた。黄金を隠したように、小さな手にギリ生まれてきたマキシキ。目を閉じて首を振り、この世を唇でマキシキは探っていた。

ほほえみながら近づけるムサの乳首を、マキシキの唇はすぐに探しあてた。乳首はマキシキのこの世であった。

マキシキ、お前に馬を見せたかった。この



世にいれば、まだ見たこともない素晴らしいものが、あの馬のように列を作って現われてくるのたま。もつとたくさんの知らないこの世を、マキシキ、お前に見せたかった。

マキシキ、と喉の奥から言葉が突きあがり、ムサは息を止めて戒律にたえようとする。唇を割って飛びだそうとする言葉を、ムサは歯で噛み砕いた。砕けた言葉は荒い息となって、彼女の唇をこじあけるのだ。

マキシキ、戻っておいで、わたしのおなかに。わたしの中の道を通って戻っておいで。

道を通ってお前がこの世にふれた時、わたしもまた、この世に新しくふれたの田舎。田舎裏の火の赤いゆらめき、沸きたつ湯の湯気のゆらめき、わたしの目の前でこたましあうこの世の姿に、わたしの心もゆらめきあはした。

そのゆらめきをしのぐような馬のたてがみ、馬の尾のゆらめきを、マキシキ、お前といっしょに見たかった。だからマキシキ、わたしのおなかに戻っておいで。そしてもう一度、

そこの



この世に生まれて出るのぢや。

※

21

銛が水を切った。鱗が光る。突きあげた鱈は宙で躍り、重みを腕でこらえながら少年の足は流れを横切る。流れにひしめく鱈の群れは少年の足にぶつかり、川の面にしがきともにはねあがった。

川辺に届いた少年は、銛ごと、鱈を葦の繁みに投げだした。葦が倒れ、音をたてる。あばれる鱈を膝で押さえ、少年は銛を引きぬいた。

かあさん、これで何匹だい。

五匹だよ。ハン口も腕があがったね。

柳の棒を手にかまえ、待っていたのは女である。女は棒で鱈の頭をすかさず叩いた。

音を後ろに、ハン口の足は倒れた葦を踏みつけていった。不意に片足が膝まで沈む。葦に隠れたよびみの深さをハン口は間違えてし



まっただだ。

前のめりになったハシロは鉈で体を支えようとしたが、鉈を突いた葦の下はしつと深くよどんでいた。ハシロは倒れ、ずぶ濡れの体で立ちあがった。腰から下は水の中だ。

物音に驚き、女は葦を踏みつけ走ってきた。濡れた髪を水をひたいにかぶり、ハシロは息を吹いた。声をたてて女は笑い、柳の棒をさしのぶる。

22

女の助けをあてにはせず、ハシロはゆっくりと足を動かした。腰から膝、膝からくるぶしと、水の高さは低くなる。裾をはしよったハシロの着物から、滝のように水が流れた。

今日は終わりにしよう。

女は一人で決めごと、葦をかきわけて歩きただした。丸めておいた一枚の簀をひろげ、もう動かない五匹の鮭を女はくるむ。ぶどうづるでそれをしばると、女は背負った。

行くよ、と女はハシロを振りかえった。滴のたれる着物のまま、ハシロは駆けだし女を



追いついた。

目の前には丘がある。丘の下に点々と建つ古びた家の一つが、二人のねぐらであった。そこから逃げだした村人たちは帰ろうとせせず、近づこうとしてもしなかつた。魔物の丘とよばれるようになったそのあたりで、二人の姿以外、人の形をしたものを見かけることはできなかつた。

日は高く、木々の影は短い。丘の頂上の岩穴の前で、ハン口は濡れた着物を脱いだ。岩の上にそれをたげるハン口の掌に、岩のぬくもりが気持ちよくつたわつた。

掌をそのままに、ハン口は右にとびのつた。はらばいになろうと彼はかがむ。下帯のかけからのぞく股の色にハン口は気がつき、彼はそつと下帯をめくつた。鹿皮をなめした下帯に似て、ハン口の肉股はすべすべだったはずである。それなのに、今、彼の肉股には黒い汚れがうっすらと這っているのだ。

あざるあざる指をやり、ハン口は汚れをこ



すうてみた。汚れは落ちず、細い毛の感触が指につたわった。彼は息をのみ、目を近づける。心臓の音が胸に痛かった。胸を押さえてハシロはあおむけになった。青い空が遠くかすみ、彼は空からはがれていた。

岩の上からハシロはとびおり、足もとの小石きにぎった。胸をはる彼の目の下で木々の背丈が低く見える。カ一杯、ハシロは石を投げた。木の葉がゆれ、彼の目を緑が酔わせた。な人の音だい、と丘の下から女の声がした。

きりぎりしから首を突きだし、ハシロは下を見た。糸の横手にまな板をおき、女は鯉の身を聞いていた。赤く濡れた彩りがハシロの眸を染め、彼は思わず目をつぶった。

夕焼けが一日の終わりを告げるころ、女は一人で丘を上っていた。戻ってこないハシロの遊び場を女は知っている。ハシロは岩穴の主人であり、そこで彼は宝物と語りあうのだ。木の実や石ころをためこんだハシロの城の入口で、女は体をかがめた。



黒い影が岩穴の壁にもたわっている。三葉を  
 ぬきつけぬ影のかたさに女はとまどった。も  
 う木の奥でもなく、石ころでもない。ハンロ  
 の相手は闇なのだ。

ハンロと女の声には艶があった。

ハンロは首を動かした。夕焼けを後ろにし  
 て、女の笑顔がめざいている。まぶしさのあ  
 まり、ハンロは目をしばたいた。夕焼けだ  
 けがまぶしかったのではない。心を隠し、彼  
 はゆっくりと入口へ這っていった。

その夜、ハンロは食事をとらなかつた。女  
 の作った料理は、食べなれた鮭の汁だった。

……ハンロの耳もとを銚がかすめ、水を切  
 った。無我夢中で手足を動かすハンロのからだ  
 には、川の中で浮いては沈む。川の底の石の  
 ならびは少しも動かず、彼の手足は同じ位置  
 から波紋を広げるだけだった。

甬を切る銚の音が、今度は頭の真上でした。  
 ハンロは首をすげめる。髪の毛をかすめ、銚  
 はしづきをあげた。彼は思わず頭をかかえた。



流れの中に頭が沈み、ハシロの体はぐるりと  
 回る。~~腹~~腹が上を向き、鉈がうなりをたてた。  
 彼は両手で腹の下をおおった。鉈がそこに突  
 きささつてゐる。引きぬこうとするハシロの  
 手が鉈をしごくとき、不思議な快感が泡のよう  
 にたちのぼつてきた。彼はしごきを速めた。  
 泡はせせらぎとなり、せせらぎは滝となる。  
 川の岸にうすあげられ、ハシロはぐったりと  
 あえいでいた。栗の花の匂がただよっている。  
 ハシロを呼ぶ女の声があった。彼はうつすら  
 と目をあげた。

悪い夢を見たんじゃないかい。声といっし  
 よに、女の顔がのぞいている。葎がきの屋根  
 の間から星が降りてきた。

悪い夢なんだろう、と女はまた言つて、ハ  
 シロのひたいの汗を掌でぬぐった。

そんなふうには、ハシロはこれまで何度汗を  
 ぬぐつてもらったことだろう。登つても登つ  
 つも梢に届かないハシロであつたり、追つて  
 も追つても後を振りむいてくれない女であつ



たり、たちまち流木に変わる鮭さえもあつた。そのたびにハシロはうなされ、女は彼をゆりおこしてはおびえ、語る夢の話に耳をかたむけてくれるのだつた。お払いのヨモギの枝がハシロの体をこすって鳴る時、彼はようやくやうやく夢からさめきり、女にしがみついたものであつた。しかし今、ハシロの見た夢は、ハシロの口をかたくつぐませこいた。

のぞきこむ女を目をさけ、ハシロは顔をそむけた。家の一角の闇の中に、白く浮きでるものがある。無数の鮭の下あごをくるんで祭る削り柳の白さであり、下あごから突きでてゐる鋭い歯並の白さであつた。歯は銛のやうにハシロをにらみ、痛みが彼の体を走つた。頭を抱えて、ハシロは顔をふせた。女の手が肩にふれる。おれ、死にたくない、とハシロは低い声で言った。

女の手のふるえを、ハシロは肩に感じた。彼は顔をあげ、女を見つめながら言った。かあさん、死んじやだめだよ。



いつかは、この世にお別れしなければなら  
ないんだよ、と澄んだまなざしで女は言った。  
— お別れして、どこへ行くの。

— 白い雲の橋を渡って、神の庭に行くの。そ  
こでは御先祖様が、わたしたちを待っている  
んだよ。

— でも、おれたちが死んだら、だれがおれた  
ちを祭ってくれるの。

— 女の手はハシロの肩をなで、頬をなでる。  
その手はハシロを背中から抱き、彼の髪をば

げしくかきむしった。ハシロの耳もとで女は  
ささやく。わたしたちの子どもが、わたした  
ちを祭ってくれるよ。



ムサをおおうイソクの体の下をムサの手が  
這った。ムサの体の上でイソクは腰を浮かす。

二人の体の隙間で、ムサは、自  
分の腰に巻きつけた御守を探った。



布が二つ、腰の左にたれている。黒い布の色は白鳥のくちばしをめぐる色であり、布の形はくちばしのように尖っていた。~~くちばし~~は、ツルウメドキの糸で編んだ紐の先につけられ、紐はムサの腰にじかに巻きつけられている。

祖先をかたどる腰の飾守は、ムサが母から与えられたものである。枯葉を招いた土の上に、更に雪が招かれると、母もまた招かれたようにツルウメドキの枝を採りに行く。ムサもよく、母に連れられ山へ行った。ムサの足にはく、かんじきの輪は、背丈にみあった小さなものであったが、雪の上に刻まれる自分の輪の跡をムサは何度も振り返っては見とれた。

赤い実が花のようにはじけている冬のツルウメドキには、鳥の群れがとまり実をついてばんでいた。人差し指で唇を押さえ、ムサのしやが声をとめると、母はかんじきの踏みしめる雪の音を気づかないながら、静かに近づいて



ていくのである。

腰の鉈を抜く母の手の動きも静かであった。まわりの木の幹や枝に蔓になってからんでいゝるツルウメモドキである。鉈の力を押さえ、母はもう一つの木の枝をかばうのだ。

そんなふうには手を加えた鉈の音でも、まわりの鳥が飛びたつてしまつたと、母はささやくようにムサに言いつけるのだつた。

「パスクル エプ コレ」

雪の上に積み重ねられたツルウメモドキに

手をのび、ムサは赤い実を採る。受ける左の掌に実がぶかぬると、ムサは空を舞う鳥にめかけて投げるのだつた。実は落ちて、ムサのまわりの雪にちらばる。

「パスクル エク」とムサは鳥を呼び、母はまた人差し指を口にやった。

木立ほのかすかなゆれをようやく保ち、ムサは鳥を待ち続ける。群れをぬけた一羽がムサの頭のすぐ上で羽音を響かせると、ムサは少しのゆれもみせないように体をかたくし



た。

羽音がやみ、一羽の鳥は雪の上で羽をしぼめる。赤い実をつつく鳥のまわりには、たちまちたくさん鳥が集まってきた。

昔、アイヌモシリを支配していた神様がね、あちらこちらを舟で見まわっていたんだって。そしてたらね、魔神が霧を吐いて陸が見えなくなってしまう、神様は困ってしまったんだよ。ところがね、霧の中から鳥の鳴き声があったので、それを頼りに無事に舟を岸に着けること

ができたんだって。熊狩りに行けばさ、熊の穴を散えて鳴いてもくれるんだよ。見かけは悪くても、鳥は立派な神様さ。

鉈を振りながら、母はそんな話をムサに語ってくれた。ツルウメモドキへの感謝の仕方、やはり母から習ったものである。

大地を持つ木の神様、あなたの体の一部をいたたきました。あなたは神様ですから、自分の力でどうか体を再生して下さい。あなたの体をいたただいたお礼に、わたしたちは粟を



さしあげます。

そんな母の言葉業を追ってムサもまた感謝を捧げ、小さな肩の袋から粟の穂をとりだすのだった。

粟の粒を穂からほぐす、ヤコチないムサの手つきにほほえみなから、母はその下に掌をひろげ粒を受けた。母の掌の粟の粒をムサは指でつまみ、枝をもうった株のまわりにおいていくのである。つまもうとするムサの背丈にあわせて、母は掌ごとしゃがんだ。ムサは

ぬ

自分の背丈が伸びたような気分になった。

縄びくくり、枝を背中に母が立ちあがる。

母は高かった。ちざんごしまった自分を感、ムサは泣きじやくった。

お前も背負うか、と母はたずねる。母もまた、子どもものころ、そんなふうにしたのだ。うなずくムサの頭をなで、母は背中の枝をおろすと、小さな束を作りムサに背負わせた。

運ばれた枝は、火の神の燃える囲炉裏のまわりをとりかこんだ。一本を抜きとり、母は



その先端を歯で噛む。割れぬの入った外側に  
左手をやり、噛んだ歯で内側を押さえ、母は  
すすると枝を二つに引き裂いた。

ムサも真似をしてみる。何度も噛まれ、さ  
さくれだった木の皮がムサの口の中に入り、  
ムサは唾といっしょに皮を飛ばした。

二つに裂いた枝の山ができる、母はまた  
歯でええ、裂けた枝から皮を剥がした。その  
皮の表から、糸になる内皮を剥がすのも歯で  
ある。

剥がれ、裂ける、皮の響きにひきよせられ、  
ムサは母の膝に手をかけていた。母の唇の間  
をムサは不思議そうにのぞきこむ。火打石の  
ような響きみせ、母の歯はぎっしりと並んで  
いる。

ムサはそっと自分の歯に指をあてて辿って  
みた。抜けた乳歯の跡が、ムサの指に何度も  
くぼみをつたえる。

母は笑いながらムサを抱きしめた。お前の  
歯は、これから伸びてくるんだよ。母さんよ



リ立派な歯になって、糸を作る人だよ。お前  
 の歯は伸びる歯。母さんの歯は欠ける歯。  
 欠けちゃ、だめ、とムサは母をゆさぶった。  
 ツルウメモドキの内皮は雪の上にさらされ、  
 雪の色と一つになる。指で細くそれを裂き、  
 裂かれた繊維はようやく糸に纏られていく。  
 その糸は弓の弦となり、背負い縄となる。綱  
 となり、女の腰の御守の紐になった。

※

屋根の萱を雨がはげしく叩き続ける。壁の  
 萱にも風は雨を叩きつけ、柱はきしんでいた。  
 濡れた家の真中で、女とハン口は屋根のゆれ  
 き見あげていた。ハン口の腰には、女の子が  
 一人しがみついている。くっつきりとした眉毛  
 はハン口に似て、細い首すじは女に似ていた。  
 出よう、ここにいてはつぶされてしまう、  
 と女は言った。雨で濡れた女の唇からしがき  
 が飛ぶ。おばい紐を持ち、女はゆっさの背

ゆっさ



中にかけた。

おれがおぶう、とハン口は紐ごとウツサ  
を抱きとった。  
女の子

行くよ、と女の声ハン口をうながした。  
風が身をかがめさせ、雨が目を閉じさせる。  
雨と風を腕でふせぎ、ようやく開いた目の下  
では濁った川のうねりが音をたてていた。

上へ行こう、と今度はハン口が叫んだ。木  
々は波のようにゆれ、引き裂かれる枝の音が  
こだまをしていた。しかし、目の下の洪水を

見れば、丘の上の岩穴だけが命を守る唯一の  
場所のようだった。

頭の上の枝のきしみを気づかいなから、ハ  
ン口は木々を降って先に行く。その足もとを  
雨水は川のように流れていた。ひとときわ高い  
きしみをたてて倒れる幹の影が見える。土砂  
の流れる重い音がすぐ近くを走っていた。

うちへかえるヨーツ、とハン口の背中でウ  
ツサが**あ**ばれる。女の手のび、ウツサの  
の手に**あ**びった。



もう少しのしんぼうだよ。なぐさめる女の  
 き。葉はまきめがなく、ウツサムはかえつてあ  
 ばれた。

昔中の車みにたえながら、ハシロは黙々と  
 先に行く。彼の足どりが速まった。女の足ど  
 りも速まる。足もとは岩肌に変わり、岩穴は  
 もうすぐだった。

崖の上に言いあがったハシロの目の下では、  
 木々の葉が宙に乱れ、川と海の見境いはなか  
 った。女に手をのべ、引きずりあげ、岩穴の  
 奥へ向かって這い続ける。とどろきかわずか  
 に遠ざかり、雨は閉ざされた。

荒い息を吐き、ハシロと女は手をついてい  
 た。昔中のウツサムが泣きじゃくっている。  
 女はおふい紐に手をかけた。水を吸い、紐は  
 重かった。

穴の中の三人には、もう川のうねりは見え  
 ない。掌のように枝をもがかせ溺れていく木  
 々、そして屋根——その屋根の下で胃袋をみ  
 たし、眠りを見だし、二人は抱きあいウツサ



△を産んだのだ。

心の川をうねっていくそれらの日々を、ハ  
ンロは閉じたまぶたで追っていた。女には女  
の思いがあり、小さなウツサムにも種子のよ  
うな隠れた日々があったはずである。

はら、つったア、と泣きじゃくるウツサム  
の声がする。ウバエリの団子をこねるかたわ  
らから、思わず手をつきだして、からだ一杯  
ぶとぶとにしてしまったウツサム。フクサの  
匂のただよう鍋の中に手をつっこみ、指を火

うく

傷してしまったウツサム。いがごとつかんだ  
栗の痛さに大声で泣いてしまったウツサム  
そんなふうにして彼女は学び、ハンロもまた  
学んだ。食べることは、生きることであった。  
頭の上を匂づかい、ハンロは入口の這って  
いった。風と雨は扉のように入りをふさいで  
いる。ハンロは濡れた着物を脱いだ。風には  
ためき、着物は重かった。

着物のすみを袋のようによく合わせ、  
ハンロは叩きつける雨水を受け取った。着物ごと、



風は彼を吹き飛ばそうとする。必死にこらえ、水をためると、ハニ口はゆっくりと向きを変えた。

水は着物の編目から洩れ、ハニ口の股を濡らす。股から落ちる水を惜しみ、彼は股をあわせたまま、いざりのように戻っていった。

飲め、とハニ口はウツサムの前に着物の水をつきだした。うすく残った水のたまりに、ウツサムは顔をつきだした。唇の音がする。

着物にしみた水さえも、ウツサムはすすり続け、いためた。

落ちる陽も、昇る陽も暗雲にさえぎられ、嵐は三日三晩も続いていた。泣きじゃくる力もなく、ウツサムは女のふところを抱かれないた。

目をあける元気もないウツサムの顔を女はいつと見つめていた。赤ん坊だったハニ口の顔をウツサムの上に重ねてもいた。命を育てるそれだけのため、女は天から来たのだった。



母さんを食べさせてやろうか、と女はウツ  
サムの耳もとでささやいた。目を閉じたウツ  
サムの首がかすかに横にゆれた。

女はウツサムをふところから離し、ハンロ  
に午渡した。あまりに軽い体の重みにハンロ  
は眉をくもらせ抱きとった。

このままではウツサムは死んでしまう。お  
前さんだつて、どうなるかわからないよー…  
だからさ、わたしを食べておくれ。

女の声は歌うようだった。ハンロは目を見  
はった。女はほほえみを浮かべている。

「ハンロ ウツサム ハンロ」と、女の歌は  
鳥のように高鳴り、ハンロの心臓が鳴った。

ふところから抜きだした女の手には、小刀  
が光っている。光は女の喉へ走った。

手からウツサムをすべり落とし、ハンロは女  
に飛びついた。炎のように血が噴きだし、ハ  
ンロの頬に熱い別れが流れていく。抱きあげ

た女の姿は白鳥に~~変~~り、白い羽がハンロの  
頬をさすって止まった。



かあちやんは、とウツサムが目を開いて不  
思議そうに言った。ハンロの弁かき落した痛  
みきウツサムはふれられている。

天へ飛んでいった。

わたしも、とんでく。

ああ、飛んでいこう。

40  
白鳥を横たえ、ハンロは喉もとに突きささ  
る小刀に手をやった。切り下げる刃にそって  
赤い肉があざやかに現われる。肉の下の内臓  
の入り組んだ神の仕掛けは、ハンロの背すじ

を思わず正させた。目を見はらせて、ウツサ  
ムはのぞきこむ。

ハンロは小刀で二切れの肉をまず切りとっ  
た。一切れきウツサムに渡し、一切れを自分  
の歯で食いちぎる。突きあがる思いの乱れを  
押しこむように、ハンロは肉をのみくだした。  
ウツサムも小さな歯を肉にあてた。

血に染まった羽もや骨がこの世のようにあ  
たりに広がり、あの世へ旅立つ頭蓋骨が二人  
の肩にやがて残された。



いやあ、飛んでいくぞ、とハンロは静かに言った。ウツサムはうなずく。

穴から首を出す、空は不思議に青かった。嵐は嘘のようである。嘘ではない証しとして、川は濁り、うねり続けていた。

岩の頂上に頭蓋骨をおくと、すべる足もとを気づかいながら、ハンロは倒れた林へおりていった。小さな足でウツサムも後をついてくる。

41

嵐に耐え残り、すくと立つ一本の柳がハンロの目の前にあつた。女の小刀を口にくわえ、ハンロの手足は幹を抱く。身軽に登つた彼の手はすぐに一本の枝をつかみ、足をかけた。

近くの一本に小刀をあて、深い削りをハンロは入れる。木屑がウツサムの頭に降り、はねあかつたウツサムの手は宙の木屑をつかもうとした。

今度は枝だぞ、とハンロが叫ぶ。最後の削りで枝が落ちると、ウツサムは頭をかかえて



逃げたした。

ハンロは飛びおりた。小枝を払い、皮を剥き、整った一本の枝を肩にかつぐと、彼はウツサムを追いたてながら頂きへ戻った。

濡れた柳は削りにくい。小刀の先に心を乗せ、ハンロは削り続けた。やわらかな木肌のまくれは女の乳房のようでもあり、腰のようでもあった。

目まががやかせて、ウツサムは手を出す。邪魔だ、とハンロの声はきびしかった。

股をかこんで盛りあがる削り柳を、ハンロは頭蓋骨に巻いて結んだ。斬りを捧げるハンロの後ろで、ウツサムは首をかたくして座っていた。かすかな風が柳の羽毛をゆらししている。両の掌で押しいたたまき、ハンロは天へ向かってそれを放した。

「ハンロ ウツサム ハンロ ホイ」

ハンロの声がこだまする。

「ハンロ ウツサム ハンロ ホイ」と、ウツ

サムは羽のように腕を動かし、岩の上では



ねた。ウツサムのしぐさを真似て、ハンロは歌った。

澄んだ空を三羽の白鳥が飛んでいく。歌は空にとけこみ、体にとけこんでいた。二人のそばに寄りそった母なる白鳥を感じながら、二人は空を飛び続けた。

43  
夕日が丘の上を染めるころ、二人は岩の上にあおむけに倒れていた。荒い息の収いこみは、飛んでいった魂を呼び戻しているかのようでもあった。

どんよりと二人は動き、岩の上にしやがんでみる。膝を抱え、首を傾け、夕焼けに見とれ、~~二人の影は、人の魂の形のようにでもあった。~~

※

イソクの体の下で、ムサの手が動く。心と体を聞く証しに、腰の御守はほどかれねばならなかった。ほどいた御守の紐が、ムサの腰



きすべつて離れる。ツルウメモドキの枝が裂かれ、皮が剥がれて走る音を、ムサは耳に感じていた。御守を作ってくれた母は、もうこの世から欠け、御守を作ってやらなければならなかった。マメシキは、ムサより早く欠けてしまった。

イソクの指がムサの繁みを探った。繁みの中の谷は、ツルウメモドキの紐のように乾いている。水を求めて、イソクの指は谷の底をたずねていった。

掘り続ける指の先に、水はどうしてもふれてこない。乳房の下まで引きおろされていたムサの下着に、イソクは手をかけた。ムサの足の先をめぐらして引き抜かれ、ムサは剥がされた。

ムサのももをイソクはつかみ、右と左にももは裂かれた。ムサをたずねてイソクはかみ、繁みに目を近づける。遠い天空の光が屋根の萱から淡くこぼれ、繁みは眠っているように静かだった。



指をあて、イソクは繁みを開いた。つぼみがのぞいている。死んだマメシキの体を洗った時のことをイソクは思いだしていた。

マメシキの頬の色が、この世の色でみなぎっていた時、イソクはムサに代わっておしめを取りかえてやったことが何度かある。割れ目を破る小さなつぼみは朝焼けのようにまぶしく、イソクは目をそらしておしめを取りかえたものである。しかし、冷たくなったマメシキの体でつぼみは色を沈ませ、見るかげも

45

なく激んでいた。屍を洗うイソクの手は、思わず動きを止めたのだ。

あたかなムサの体のつぼみは、死んだマメシキのつぼみとほとんど同じ色あいだった。遠ざけるように、イソクは目を閉じた。目の中で、色は雲のようにひろがり、イソクのは分厚くふさがれていた。

マメシキ、と口から出かかる言葉をこらえ、イソクは腰を突きたしムサを探った。あの世を押しぬけるように、ムサの中に入っていく。



馬のようにゆれるイソクの尻をムサは両手で抱えた。ムサの尻も馬だった。たてがみのように髪の毛のゆれるイソクの頭をムサは両手で抱えた。ムサの髪もたてがみだった。

ムサの爪がイソクの背にのび、ツルウメモドキの糸のように傷が走った。引き裂かれ、引き裂がされぬばなうないものが、ムサの上のしかかっているようだった。

ムサの歯が光った。イソクの肩に歯は喰いこみ、歯は戒律を二つに割る。

「マキシキーツ」

ムサの叫びは、イソクの腰を押し戻した。

おびえ、ちぢみ、たれさがるものを、イソクは股の間で感じていた。

イソクの目の下で、ムサの胸がはげしく波打っていた。すぐ目の下にムサはいるが、ムサはイソクから遠かった。

胸の中でムサは走り、ムサは駆けていた。

たてがみがなびき、蹄が耳目をたてる。シネプ、トウプ、レプ、イネプ……数えきれない馬の



影が、ムサをよぎり、渦巻いていた。

子馬の影もまじっている。

「マキシキ タネシ アペ クネワ」と、

子馬のいななきはどこか舌たらずであった。

子馬のたてかみの先についている顔は、マキシキである。

「シモツク タネシ アムペ クネワ」

いななきが重なっていた。子馬に寄りやい

走っているのは、ムサの母、シモツクであっ

た。わたしはシモツクという者ですよ、と名

乗りをいななき、マキシキもまた、名をいな

ないで駈けるのだ。

「オマンテ タネシ アムペ クネワ」

「アリヤン タネシ アムペ クネワ」

「ヤイヌカ タネシ アムペ クネワ」

ムサの父、祖父母たちも名乗っている。ノ

チヤシ、オンネシ、ホツパ、コトイター、顔

も名も知らなかった祖先たちが、ムサの血の

中で名乗っている。血には千年の道が通い、

道は火山灰の白鳥の足跡からはじまっていた。



道は白鳥の空に通じ、千年の時間の中を語り  
つがれてきたのである。

「ムサ タプ ネシ アムペ クネワ」

ムサもいななき、走っていた。一面のプク  
サの緑を馬の蹄は剥いていく。川辺の草を馬  
は踏みつけ、川は泥色に濁っていく。馬はそ  
れでも駆け続けるのだ。

いつの間にか羽を持ち、馬は宙を飛び、空  
を飛んでいた。黒雲のように群れは分厚く、  
闇は光のようにムサの目をくらませた。

膝をつき、イソクは息をのんでムサを見上  
げていた。糸一つ着けない体で立ちあがり、  
ムサは踊りはじめたのだ。二つの手をはばた  
かせ、ムサは喉をふるわせる。

「ハンロ ウツサム ハンロ ホイ。ハンロ  
ウツサム ハンロ ホイ」

ムサの目は日輪のように熱く燃え、イソク  
をおののかせた。

後ずさりをしながら、イソクは立ちあがっ  
た。尻にたれた下帯を腰の紐にこじ入れなが



